

# 五言拗律の系譜

——方回『瀛奎律髓』の「拗字類」を手がかりに——

丸 井 憲

## 一、はじめに

宋末元初の文人・方回の編著になる『瀛奎律髓』は、その卷之二十五「拗字類」「五言十首」の部に、杜甫の五律三首（「已上人茅齋」詩、「暮雨題瀼西新賃草屋五首」其五詩、「上兜率寺」詩）、賈島の五律三首（「酬姚校書」詩、「早春題湖上友人新居」詩二首）、黃庭堅の五律二首（「次韻楊明叔」詩、「次韻高子勉」詩）そして陳師道的五律二首（「別負山居士」詩、「寄答李方叔」詩）を収める。<sup>(1)</sup>筆者はかつて、杜甫の五律六二七首中に見られる拗體の諸特徴が、賈島の五律二二六首中にも顯著に覗われることを、「賈島の五言拗律について——杜律との比較を中心に——」<sup>(2)</sup>と題する小論で指摘した。その後筆者は初唐の五言四韻詩約一千首を通讀し、また盛唐の主たる宮廷詩人らの五律を

精讀した結果、五言拗律に對する認識をやや新たにするに至っている。<sup>(3)</sup>本稿では『瀛奎律髓』所收の詩を讀みながら、五言拗律の諸形態を再度確認し、さらにそれらの形態が唐代を通じて繼承されてゆくさまを、いくつかの唐詩の例を引きながら概觀してみたい。

そもそも拗體とは、嚴密な近體詩の格律に照らせば、畢竟、破格な句型にはかならない。しかしそれらが破格として斥けられず、拗體という呼稱のもとに、律體（正格）に準ずる扱いを受けてきたのは、それらが中唐以降の五律のうちに受け繼がれ、かつ宋代以降の詩論家らにより、なお律詩の體を損なわぬもの、と認められてきたからであろう。唐代を通じて制作され續けたことが、破格な句型を結果的に拗體たらしめた、と言うこともできよう。

## 二、五言拗律の諸形態

以下では、五言拗律の各形態をいま一度整理してみる。筆者は上述の小論において、杜甫や賈島の五律に見られる拗體を列挙する際、「aB式變例」群と「bA式變例」群という、王力氏の用語に基づく呼稱を用いた。しかしその後の調査において、それら「變例」群のうち、實際に拗體と稱すべきものは一部に限られることを確認した。<sup>(4)</sup> 以下、五言拗律の形態を限定するとともに、呼稱の調整も行ないたい\*。

\* 王力氏は『漢語詩律學』（上海：新知識出版社、一九五八）第一章「近體詩」の第六節「平仄的格式」において、平仄から見た五言律詩の句式は詰まるところ「仄仄平平仄」「仄仄仄平平」「平平平仄仄」「平平仄仄平」の四種に歸着するとして、順にそれぞれa式、A式、b式、B式と命名した。そしてB式以外の句式の第一字はしばしば平聲・仄聲のいずれをも用いうると述べているから、實際の句式を平仄符號に置き換えれば、以下のように表記できる。

a式：●○○○● A式：●●●○○  
b式：●○○○● B式：○○○●●◎

（○印は平聲、●印は仄聲、◎印は平聲韻脚を表す。また、●印は本來仄聲であるが平聲も用いうることを、●印は本來平聲であるが仄聲も用いうることを示す。以下同）

また、上記四種の句式を反法の規則に従って連結すれば、以下の二つの聯に歸着し、

a ●○○○●／B ○○○●●◎

（首句押韻時のみ上句が「A ●○○○●◎」となる）

b ●○○○●／A ●○○○●◎

（首句押韻時のみ上句が「B ○○○●●◎」となる）

平韻の五言律詩は、原則として、この二つの聯により構成される。王力氏は前者の聯を「aB式」、後者の聯を「bA式」と呼んだが、前者の上句は仄起であるから、これを「仄起式聯」と呼び、後者の上句は平起であるから、これを「平起式聯」と呼ぶほうが、聯の形態をより端的に示すことができる。本稿では、上記二種の聯をそれぞれ「aB（仄起）式聯」「bA（平起）式聯」というふうに兩名併記することにした。



















まず、「aB（仄起）式聯」（a ●●○○●●／B ○○○●●●）か  
ら派生した拗體には、

\* 平仄符號に附された傍線は拗字を示す。以下同。

という三種の形態があり、本稿では「aB（仄起）式拗聯」群と總稱するが、これらはつまるところ、下句の形態を同じくし、上句の拗字の位置に違いがあるにすぎない。特に上句の形態を區別する必要がある場合には、各拗聯の下に附した「イ・ロ・ハ」の符號に據るものとする。また「bA（平起）式聯」（b ○○○●●●／A ○●●○○○）から派生した拗體には、

といった形態があり、本稿では「bA（平起）式拗聯」群と總稱するが、同群中の各形態は、上・下句同時に拗聯として現

## 五言拗律の系譜（丸井）

れることは少なく、むしろ上・下句各々單獨で拗句となること  
のほうが多い。すなわち、上句b式が單獨で「」  
（「仄三連」。「下三仄」「三仄脚」などとも呼ぶ）、下句A式が單獨  
で「」（「平三連」。「三平調」「下三平」「三平脚」などと  
も呼ぶ）、上句b式が單獨で「」（「挟み平」）となる  
例のほうが多いため、本稿で各形態に言及する場合には、括  
弧内の通稱に據るものとする。

三、受け繼がれゆく五言拗律

さてこの項では、方回が掲げる五言拗律作品を、その平仄配置や對偶表現に留意しながら讀んでゆく。また方回がそれらの作品に附した評語も、ここでは丹念に拾つてみよう。筆者がかつて取り上げた詩は本項では扱わず、未讀のものを中心に分析するが、それらの作品中に現れた拗體が、唐代を通じて繼承されてゆくさまを、他の詩人らの五律の例も引きながら跡づけてみたい。このうち「aB（仄起）式拗聯」に類するものは、既發表の各小論で詳しく論じてきたので、本項ではその繼承の跡をたどるに留め、専ら「bA（平起）式拗聯」に屬するものを細かく見てゆく。なお、南宋の周弼編著『唐賢三體詩法』（以下、『三體詩』と略稱）の「五言律詩」の部に

收められた孟浩然や王維の作品が、明・清以降の唐詩注釋家らにより五言古詩として處理されていることについても、本項後段で少しく觸れてみることにしたい。

(1) 「bA (平起) 式拗聯」の系譜

本項前段では主に「bA (平起) 式聯」(b●○○●●／A●●●○○○)から派生した形態、すなわち上句が「●○○●●」(「仄三連」)、下句が「●●○○○○」(「平三連」)、あるいは上句が「●○○●●」(「挟み平」)となった形態に特に留意しながら、方回が掲げる作品をいくつか讀んでみよう。

暮雨題瀼西新賃草屋五首其五<sup>(6)</sup> (暮雨 瀼西に新たに賃

せる草屋に題す五首 其五) 杜甫

欲陳濟世策	已老尙書郎	b	●	○	●	●	●	／	A	●	○	○	○
不息豺虎鬪	空慚鵝鷺行	a	●	●	○	○	○	／	B	○	○	○	○
時危人事急	風逆羽毛傷	b	○	○	○	○	○	／	A	○	○	○	○
落日悲江漢	中宵淚滿床	a	●	●	○	○	○	／	B	○	○	○	○

【訓讀】陳<sup>の</sup>べんと欲す 濟世(經世)の策／已に老いたり 尙書の郎(工部員外郎の自分はずでに年老いている)＝息<sup>や</sup>まず 豺虎の鬪い(逆賊ら同士の鬪争)／空しく慚づ 鵝鷺の行(かつ

て朝廷に列していた自分)＝時危うくして 人事急に(世情は急を告げ)／風逆<sup>さかしま</sup>にして 羽毛傷む(朝臣らは尾羽打ち枯らししている)＝落日 江漢(夔州の峽谷に流寓する身の上)を悲しみ／中宵 涙 床に滿つ

右の詩は、大曆二年(七六七)、杜甫が夔州の瀼西に流寓していた頃に詠んだ五律であるが、首聯に「仄三連」と「平三連」の組み合わせが出ている。このうち「仄三連」は初唐以來ほぼ律句に準ずる扱いを受け、各時代を通じて五律に頻用されてきたが、一方の「平三連」は律詩制作上の禁忌と考えられてきた。この二者が上・下句をなす用例は甚だ少なく、筆者の調査によれば、杜甫の五律六二七首中でもわずか八首(二・三%)にしか見られない。

●●●●●	欲陳濟世策	●●●●●	陳べんと欲す	●●●●●	濟世の策
●●●●●	已老尙書郎	●●●●●	已に老いたり	●●●●●	尙書の郎

對句仕立てのこの首聯の平仄配置について、方回は『濟世策』の三字は皆仄にして、『尙書郎』の三字は皆平なれば、乃ち更に律に入るを覺ゆ(かえってますます韻律に適うように感じ

られる<sup>(9)</sup>』という評語を附けている。一方、『瀛奎律髓刊誤』を著した清の紀昀は、これに對して「此れ亦た雙拗（上・下句ともに拗字を用いた形態すなわち拗聯を指す、紀昀の用語）にして、乃ち『濟』『尚』の二字、廻換せり〔相互に平仄を入れ換えている〕。三平、三仄の謂に非ず<sup>(10)</sup>』という批語を附し、これが上・下句第三字の平仄を同時に反轉させた一種の拗聯であることを認めつつ、この場合には「仄三連」「平三連」という個別のとらえ方は適當でないとする。なお、張九齡の五律八四首中では二首（二・四％）にこの形態が認められるが、王維の五律中には見あたらない。賈島の五律二二六首のうちでも二首（〇・九％）にしか見られない形態である。このような希少な例を破格ではなく拗體とみなした方回や紀昀らの腦裏には、杜甫の七律の奔放な平仄配置が掠めていたのかもしれない。事實この「仄三連」と「平三連」の取り合わせは、杜甫や北宋の黃庭堅の七律中には比較的よく現れ、

落花遊絲白日靜 鳴鳩乳燕青春深  
b ●○○○●●●●／A○○●●●○○○

——杜甫「題省中壁」詩（七律）頷聯  
客子入門月皎皎 誰家搗練風淒淒

五言拗律の系譜（丸井）

b ●●●○○●●●／A○○●●●○○○  
宴寢清香與世隔 畫圖絕妙無人知

——黃庭堅「題落星寺四首」其三詩（七律）頷聯<sup>(11)</sup>

などの詩を、方回は「拗字類」「七律十八首」の部に收める。<sup>(12)</sup>

\* ちなみに、前掲の杜律「暮雨題瀼西新賃草屋五首其五」詩の頷聯は、

●●●●●  
不息豺虎鬪 息まず 豺虎の闘い  
○●○○●●○  
空慚鵝鷺行 空しく慚づ 鵝鷺の行

という形態であつたが、これは上句の第四字を拗字とし、かつ下句の第三字を拗字とした「aB（仄起）式拗聯」ロ型（王力氏のいう「丑類特殊形式」）に相當する。方回は『豺虎』『鵝鷺』又は是れ一樣（一種）の拗體なり<sup>(13)</sup>と評し、紀昀も「上句の二・四諧はずんば、下句の第三字に必ず平聲を用ひて以つて之を救ふは、亦た是れ定格〔正格に準ずるもの〕なり<sup>(14)</sup>」と補足する。この拗聯は杜甫の五律には少ないが、王維がややこれを好んだ

## 中國文學研究 第三十七期

ことを、筆者はかつて指摘したことがある。<sup>(15)</sup> 唐人たちの他の用例を挙げれば、

落日池上酌 清風松下來 a ●●○○●●／B ○○○○●●◎

——孟浩然「裴司士員司戶見尋」詩（五律） 頷聯<sup>(16)</sup>

野火燒不盡 春風吹又生 a ●●●●●●／B ○○○○●●◎

——白居易「賦得古原草送別」詩（五律） 頷聯<sup>(17)</sup>

談笑爲故事 推移成昔年 a ○●○○●●／B ○○○○●●◎

——柳宗元「種柳戲題」詩（五律） 頷聯<sup>(18)</sup>

などがある。上句の四字めを仄聲とし、下句の三字めを平聲に換えたこの拗聯は、後世へ着實に受け繼がれていったのである。

\*

\*

\*

上兜率寺（兜率寺に上る） 杜甫

兜率知名寺 眞如會法堂 a ○●○○○●●／B ○○○○●●◎

江山有巴蜀 棟宇自齊梁 b ○○○○●●／A ●●●●●◎

庾信哀雖久 周顒好不忘 a ●●○○○●●／B ○○○○●●◎

白牛車遠近<sup>(20)</sup> 且欲上慈航 b ●○○○●●／A ●●●●●◎

【訓讀】兜率 知名の寺／眞如 會法〔佛法を領會する〕の堂＝江山 巴蜀を有し／棟宇 齊梁自りす＝庾信 〔賦を詠んで〕哀しむこと久しと雖も／周顒 〔佛教を〕好むこと忘れず＝〔法華經にいう〕白牛〔が牽く〕車は遠近〔どこへでも行くことができる〕／且く慈航〔救いの舟。般若の智慧の喩え〕に上らんと欲す

廣徳元年（七六三）春、杜甫が假寓先の梓州で兜率寺という名利に登ったときに詠んだ五律である。頷聯上句に「挾み平」（王力氏のいう「子類特殊形式」）が出ているが、この形態は唐・宋の五律中、實に枚舉に遑がないほど頻出する。この詩に附された方回の評語を讀んでみよう。

此寺棟宇自齊梁至今、則所用「自」字決不可易、亦既工矣。江山有巴蜀、「有」字亦決不可易、則不應換平聲字、却將「巴」字作平聲一拗。<sup>(21)</sup>

【訓讀】此の寺の棟宇は齊梁より今に至れば、則ち用ふる所の「自」字は決して易ふ可からず、亦た既に工なればなり。江山は巴蜀を有す、「有」字も亦た決して易ふ可からざれば、則ち應に平聲字に換ふべからず、却つて「巴」字を將つて平聲一拗を作



す。

この評語の大意は「下句の『自』(去聲「至」韻。以下、四聲の注記はすべて『廣韻』に據る)字は他の字に置き換えられぬほど巧みであり、上句の『有』(上聲「有」韻)字も動かせず、平聲には換えられないので、四字めに『巴』(下平聲「麻」韻)字を置いて拗體とした」となるだろう。紀昀はこれに批語を附して「此れ單拗法(一句の中で拗體をなす作法)なり。單拗なる者は本句三、四の平仄を互ひに換ふるなり(この句の第三字と第四字の平仄を相互に入れ換えたもの)。惟だ出句(上句)にのみ用ひ、對句(下句)には用ひず」と、「挟み平」の作法を解説したうえ、「此れ乃ち巴蜀の『巴』字、易ふ可からざれば(地名であるから換えられないため)、『有』字を以て之を拗せるのみ(三字めに仄聲の『有』字を置いて拗體にしただけのこと)。下説は是に非ず(方回のここでの説明は誤りである)」と述べる。確かに、作詩法の基本という意味では、紀昀のいうことは正しい。しかし詩人が秀句を産み出す瞬間の話をしているのだとすれば、方回の説にも一理あるう。杜甫が上句の三字めに「有」字を置いて「挟み平」としたのは、單にその後の「巴蜀」の二字が地名で動かせないからという、消極的な理由だけで

五言拗律の系譜(丸井)

はなさそうである。

江山有巴蜀 江山 巴蜀を有し  
棟宇自齊梁 棟宇 齊梁自りす

この頷聯の對句が警拔なのは、上句の「有」字に負うところが大きいと言えないだろうか。仇兆鰲はこの二句を「江山、巴蜀を兼有すとは、其の形勝を寫し、棟宇、起ること齊梁自りすとは、其の古迹を推たづぬ」と解しているが、それならばこの頷聯は「兜率寺を取り卷く江山は、廣く巴・蜀全域にまで連なっており、兜率寺の伽藍の建立は、遠く齊・梁の頃にまで遡り得る」という意味になるだろう。まことに時空を超えて擴がる壯大な對句であつて、宋の詩論家・葉夢得も『石林詩話』の卷中において「遠近數千里、上下數百年、祇だ『有』と『自』兩字の間に在り。而して山川を吞納するの氣、古今を俯仰するの懷、皆言外に見るあらは」と感嘆頻りである。假に「巴蜀」の二字を動かせず、三字めに仄聲を置く必要に迫られていたとしても、ここで「有」字を拈り出す、杜甫の力量を思ふべきであろう。なお、警拔な對句を産む「挟み平」の他の用例で、筆者が思いつくものに、

流星透疏木

流星  
疏木を透りとほ

〔星は疏らな木々を透かして流れゆき〕

走●月●逆●行●雲●




走月 行雲に逆らふ

〔月は移ろう雲に逆らつて走にげ去る〕

——賈島「宿山寺」詩（五律）頷聯<sup>26</sup>

がある。賈島のこの頷聯は古來、夜空の動態を活寫した秀句として名高いが、やはり上・下句の要にあたる第三字の「透」字と「逆」字の配置の妙が、この聯をひとときわ愛唱すべきものになっている。賈島はあるいは「透」（去聲「候」韻）字の絶妙さを活かさんがため、その後ろに「疏」（上平聲「魚」韻）「木」という表現を用いたのではなからうかとも想像される。<sup>(27)</sup>「挾み平」には小刻みに起伏する韻律上の輕快さがあり、五律の尾聯上句に多用されるが、前掲の杜詩やこの賈島詩の例のように、對句の中に用いることで、上句に彈むような韻律効果を持たせることもできるのである。

(2) 「aB (仄起) 式拗聯」の系譜

本項後段では、「aB（仄起）式聯」（a      / B   

●  
◎  
☺  
から派生した、

これら「aB（仄起）式拗聯」群を見てゆくが、このうち口型（王力氏のいう「丑類特殊形式」）は前段で觸れておいたので、以下では特にイ型とハ型の形態を、方回が掲げる作品の中で、改めて確認してみることにはしたい。

早春題友人湖上新居二首其一（早春 湖上の友人の新居

に題す二首 其一 賈島

近得雲中路	門長侵早開	a	●	●	○	○	●	●	/	B	○	○	○	○	●		○	○	○
到時猶有雪	行處已無苔	b	●	○	○	●	●	/	A	○	○	●	●	○	○	○	○	○	○
勸酒客初醉	留茶僧未來	a	●	●	●	○	●	/	B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
每逢晴暖日	惟見乞花栽	b	●	○	○	●	●	/	A	○	○	●	●	○	○	○	○	○	○

【訓讀】 近づき得たり 雲中の路／門は長に早を侵して〔朝まだきに〕 開く＝到る時 猶ほ雪有り／行く處 已に苔無し＝酒を勧めれば 客初めて酔い／茶を留むるも 僧未だ來らず＝晴



暖の日に逢ふ毎に／惟だ見る 花栽〔花の苗木〕を乞ふを

——許渾「早秋三首」其一詩（五律）頷聯<sup>(33)</sup>

この詩の頷聯に出ている拗體は「aB（仄起）式拗聯」イ型（a●●●●●／B●●●●●）に当たり、賈島の五律二二六首中四九首（二二・七％）に見られる形態。この拗聯の韻律上の特徴は、上句における平聲の重點を第四字に置き（●●●○、●●●○）、かつ下句における仄聲の重點を第四字に置くことで（○●●●、○●●●）、上・下句ともに深い起伏を産む點にある。この深い起伏を賈島はとりわけ好んだが、方が上掲詩の頷聯について『客』字、『僧』字は拗對にして、詩家に甚だ多し<sup>(29)</sup>と評するとおり、実際には賈島だけでなく、中唐以降の詩人がこぞつてこの形態を使用しており、

飛鳥沒何處 青山空向人 a ○●●●●／B ○●●●●◎

——劉長卿「餞別王十一南遊」詩（五律）頷聯<sup>(30)</sup>

以我獨沈久 愧君相見頻 a ●●●●●／B ●●●●●◎

——司空曙「喜外弟盧綸見宿」詩（五律）頷聯<sup>(31)</sup>

蕃漢斷消息 死生長別離 a ○●●●●／B ●●●●●◎

——張籍「沒蕃故人」詩（五律）頷聯<sup>(32)</sup>

高樹曉還密 遠山晴更多 a ○●●●●／B ●●●●●◎

など、多くの用例が見出される。このため近世以降の人々は、これを純正の律體として受け入れてきたふしがあるが、江戸時代の三浦晉（梅園）もその著『詩轍』卷之二「體製」「拗句」の條で、

今俗●●●●●／●●●●●「イ型。傍線および斜線は引  
用者。以下同」是拗法〔拗體〕ニシテ、正法〔律體〕ニ  
非ザルヲ、二四不同ノ禁ヲ犯サザレバ、正法ノ様ニ意  
得〔考え〕、●●●●●／●●●●●「ハ型。後述」是モ  
上ト同ジ拗法ナルヲ、二四不同ノ禁ヲ犯ス故、大二失  
格〔破格〕ノ様ニ思フハ、聲律〔韻律〕ニ不案内ナル故  
也。<sup>(34)</sup>

と説くとおり、「a●●●●●／B●●●●●◎」（イ型）は紛れもない拗體の一種であつて\*、筆者の調査によれば、初唐の末の五律確立時にはあまり見られなかったものである。<sup>(35)</sup>

\* なお、以下に掲げる詩は、周弼編著『三體詩』の「五言律詩」「二意〔拗體とほぼ同義〕」の部に収める孟浩然の作品である。

晚泊潯陽望廬峰（晩に潯陽に泊して廬峰を望む） 孟浩然

掛席幾千里 名山都未逢 a ●●●●●／B ○○○●●●

泊舟潯陽郭 始見香廬峰 b ●●○○○○●／A ●●●○○○

嘗讀遠公傳 永懷塵外蹤 a ●●●●●／B ●○○○○●

東林精舍近 日暮坐聞鐘<sup>(36)</sup> b ○○○○○／A ●●●○○○

【訓讀】 席を掛く 幾千里／名山 都て未だ逢はず＝舟を潯陽の郭に泊し／始めて香廬峰を見る＝嘗て遠公（慧遠）の傳を讀み／永く塵外の蹤を懷ふ＝東林 精舍近く／日暮 坐るに鐘を聞く

この詩の首聯と頸聯に出ているのも「aB（仄起）式拗聯」イ型である。ところが『四部叢刊』所收の明刊四卷本を底本とした徐鵬氏の『孟浩然集校注』は、この詩を「五言古詩」の部に收める。明人がこの詩を古詩と斷じた理由は、實はイ型にあるのではなく、頷聯上句（●○○○○）が二・四不同を守らず、かつ下句（●●○○○）が「平三連」になっており、さらにこの聯の「泊舟」と「始見」の對偶性がやや弱いことなどにあるのであろう。明人の詩律觀が宋人のそれよりも嚴格であつたことが、こうした事例から覗われる。これは、盛唐の詩を稱揚し

た明人らにとつて、近體詩律を逸脱した律詩の存在は不都合なものであつたため、律詩の部から慎重に除外されるに至つたものと考えられる。

\*

\*

\*

次韻楊明叔四首其三<sup>(37)</sup>（楊明叔に次韻す四首 其三） 黃庭堅

全德備萬物 大方無四隅 a ○●●●●／B ●○○○○●

身隨腐草化 名與太山俱 b ○○○●●／A ○○○●●

道學歸吾子 言詩起老夫 a ●●○○○／B ○○○●●

無爲蹈東海 留作濟川桴 b ○○○●●／A ○○○●●

【訓讀】 全德 萬物備はり〔全德の人〕楊明叔どのには、あらゆるものが備わつており／大方 四隅無し〔その方正なる人格には、分け隔てというものが無い〕＝身は腐草に隨ひて化し〔御身はいずれ螢と化し〕／名は太山と俱にす〔令名は泰山に齊しく轟くであらう〕＝學を道へば吾子〔そなた〕に歸し／詩を言へば老夫〔おのれ〕を起たしむ＝爲す無かれ 東海を蹈むを〔どうか仙界になど渡られることなく〕／留まりて濟川の桴と作れよ〔ここ黔州に留まられ、經世濟民に勤しまれよ〕

右の詩は、北宋の紹聖四年（一一〇九七）、黔州に流されていた黄庭堅が、當時その地の地方官であった楊皓（字は明叔）の詩に次韻した五律であるが、この首聯に、

全德●●●●●  
 萬物●●●●●  
 大方無四隅●●●●●  
 全德 萬物備はり  
 大方 四隅無し

という對句仕立ての「aB（仄起）式拗聯」ハ型（a●●●●●／B●●●●●）が出ている。この形態が杜甫の五律中から徐々に現れ始め、賈島もこれを踏襲したことを、筆者は既發表の小論中でしばしば論じてきた。用例は少ないながらも、五言拗律を語るうえで缺くことのできない形態であり、とりわけ黄庭堅が、首聯を對句にしてこの拗體を配する、杜甫ばりの作法をしつかりと受け継いでいるのは、やはり特筆に値しよう。

この詩に附された方回の評語のうち、平仄に關する部分を見てみると、『腐草』の『腐』、拗せざる容からず〔領聯の『腐草』の『腐』字は、拗字とせざるを得なかった〕。一定の字の易ふ可からざるに縁ること、『備萬物』、『無四隅』の如きも亦た然り〔ある特定の文字が換えられないため拗體を用いるのは、首聯の

#### 五言拗律の系譜（丸井）

『備萬物』と『無四隅』においても同様である<sup>(38)</sup>〕と、領聯と首聯とを一緒に評するが、やや要領を得ぬ説明になっている。これに對して紀昀は「起二句は是れ拗字にして、次句自づから應に二平なるべし〔首聯は拗體であり、下句におのずと「二平」〕第二字の「方」と第三字の「無」を用いることになったのであろう。『腐草化』の得て三仄を用ひしは、乃ち正格にして、以つて拗字と爲すは、謬ること甚だし〔領聯に『腐草化』という「仄三連」をうまく使っているが、これはむしろ正格であり、方回がこれを拗體と考えるのは謬見も甚だし<sup>(39)</sup>〕という、明解で正鵠を得た批語を附けている\*。紀昀はここで、首聯が拗體であることを明確に指摘しつつ、領聯についての方回の説明を補正しているのである。

\* 紀昀がここで「仄三連」を正格〔律體〕と言い切っているのは、おそらく正しい。なぜならば、この形態は初唐の五言四韻詩中にすでに夥しく現れ、近體詩律が整備されてゆく過程において、すでに律句として認知されていた可能性があるからである。

筆者の調査によれば、黄庭堅の五律一一二首中六首（五・四％）にこの「ab（仄起）式拗聯」ハ型が出ており、この出現率は杜甫のそれ（二二／六二七首、三・三％）や賈島のそれ（六

／二二六首、二・七％）を上回っている。方回が上掲の詩の次に掲げる、同じく黃庭堅の「次韻高子勉十首其一」（高子勉に次韻す十首其一）詩の頸聯にも、

●●●●●●●●  
久立我有待 我待つ有り  
○●○●○●○●  
長吟君不來 君は來らず  
長く吟ずるも

という、ハ型の對句が見える。方回はここで『我』を以つて『君』に對す、字の工なる者に非ずと雖も、亦た拗句の健を見る<sup>(40)</sup>という評語を附している。杜甫や賈島の手によつて開花したこの拗聯は、

漸與骨肉遠 轉於僮僕親 a ●●●●●●●●／B ●●○●○●○●

——崔塗「巴山道中除夜書懷」詩（五律）頸聯<sup>(41)</sup>

高閣客竟去 小園花亂飛 a ○●●●●●●●／B ●●○●○●○●

——李商隱「落花」詩（五律）首聯<sup>(42)</sup>

このように中・晩唐の詩人らにより縷々として受け繼がれてゆき、ついには黃庭堅の五律のうちに、

●●●●●●●●  
萬事不掛眼  
○●○●○●○●  
四愁猶有詩

萬事 眼に掛けず  
四愁 猶ほ詩有り

——黃庭堅「陳榮緒惠示之字韻詩誰獎過實非所敢當輒次高韻三首」其二詩（五律）頸聯

●●●●●●●●  
墮我玉麈尾  
○●○●○●○●  
乞君宮錦袍

我に墮す 玉の麈尾〔拂子〕  
君に乞ふ 宮の錦袍

——黃庭堅「贈慧洪」詩（五律）頸聯

こうしてしつかりと受け止められた。確かに黃庭堅は五律の作家とは必ずしもいえず、一九〇〇首を超える彼の作品中、五律は一〇〇首餘りを占めるに過ぎない。しかしおよそ三〇〇首を数えるその七律は、古來、黃庭堅の風格の一端を十分に現すものと見なされてきた。うち「桃李 春風 一杯の酒／江湖夜雨十年の燈」という頷聯で名高い初期の七律「寄黃幾復」（黃幾復に寄す）詩の頸聯の、

○●○●○●○●  
持家・但有四立壁  
●●●●●●●●  
治病・不斲三折肱

家を持するに但だ四立の壁有るのみ  
病を治むるに三たび肱を折るを斲めず

この上・下句下五字にも、實は前掲の五律群と同様の拗體がすではつきりと認められる。唐・宋の詩人たちが、近體詩の嚴格な規則の下で、韻律上の趣向を密かに凝らし續けていたことが、以上のことからよく覗われよう\*。

\*なお、下掲の詩は『三體詩』『五言律詩』『一意』の部に收められた王維の作品である。

#### 終南別業 王維

中歲頗好道	晚家南山陲	a	○●●●●	/	B	○●○○○
興來每獨往	勝事空自知	b	●○○●●	/	A	●●○○○
行到水窮處	坐看雲起時	a	○●●○○	/	B	●●○○○
偶然值林叟	談笑無還期	b	●○○○○	/	A	○●○○○

【訓讀】中歲 頗る道を好み／晩に家す 南山の陲＝興來つて毎に獨り行き／勝事空しく自ら知る＝行きて水の窮まる處に到り／坐して雲の起こる時を看る＝偶然 林叟に値ふ／談笑して還る期無し

王維の代表作の一つであり、今日においても多くの人がこの作品を五言律詩と見なしていると思われる。しかるに清の趙殿成は、この詩をその著『王右丞集箋注』の「五言古詩」の部に

#### 五言拗律の系譜（丸井）

編入している。首聯の上句（a ○●●●●）は、上掲の黃庭堅詩にも見られた「aB（仄起）式拗聯」ハ型の上句と同一であるが、下句（B ●○○○○）の形態は平聲が四字も連なる甚だしい破格になっている。また、領聯の下句（A ●●○○○）は「挾み仄」とも呼びうる形態だが、筆者の調査によれば、初唐の五言四韻詩九六五首中七首（○・七％）にしか見えず、杜甫の五律六二七首中には見られなかった。およそ下句で二・四不同を破つた形を、近世の注釋家たちは容易に律體と認めない傾向がある。頸聯は「aB（仄起）式拗聯」イ型、また尾聯の上句が「挾み平」、下句が「平三連」という拗聯は、王維や杜甫、陸龜蒙の五律などに若干見られる。<sup>(43)</sup>なお、領聯が嚴密な對句でないことも、清人がこの詩を五律とするのを憚かる理由の一つになっているよう。

#### 四、おわりに

律詩は「對偶觀念の純粹形式」とも言われ、「句型・押韻・平仄の韻律構造から、對偶性・整合性・完結性の表現機能に至るまで、最も徹底した對偶的性格を具現した様式」であり、この詩型こそが「より純粹に中國文學史を代表」するものと言い得る。<sup>(44)</sup>まことに、黄金分割にも喩うべきその均衡の美は、



中國古典詩が多くの試行を重ねた末に行き着いた、ひとつの極致を示している。そして律詩の文學的な完成は、杜甫という詩人に負うところ大であったが、その杜甫の律詩に平仄上の不均衡がしばしば見られるという事實は、律詩が究極の完成に達した直後から、この詩人が新たな方向を模索し始めていたことを物語る。すなわち、定型化という成熟から、形骸化という衰退へ向かう、文學一般が陥りがちなその陥穽を回避せんがため、杜甫はまず、律詩内部における表現力の擴充を圖ろうとしたのである。近體詩律から外れた古風な平仄配置をふたたび取り込むことにより、律詩に新たな活力を吹き込もうとした彼の企圖は、宋代に至つて「拗體」という概念のもとに明らかにされた。

北宋の釋慧洪（字は覺範。『石門文字禪』などの著者）がまとめたという作詩のテキスト『天廚禁鱗』は、黃庭堅の拗體七律に最も早く言及した書物の一つであろう。慧洪は黃庭堅の拗體の作法を「魯直の換字對句法」と呼び、こうした作法は黃庭堅の詩にしか見られないと述べた。しかしその後、胡仔が『苕溪漁隱詩話』の中で、この種の「拗句」は杜甫に始まるのだと反論し、さらに南宋の王楙はその著『野客叢書』において、こうした「拗句格」は杜甫以前からあるのではない

か、との疑問を呈した<sup>(45)</sup>。以上は、宋人たちが唐・宋の律詩に見られる奇妙な平仄配置に氣づき始めた頃の初々しい議論であり、こうした議論を受けて、周弼、范晞文、方回ら宋末の詩論家たちが、唐代の變則的な律詩の研究を始めたのが、この拗體論の起りである。なканずく、宋代江西派の掉尾を飾る詩人でもあつた方回は、この「拗字類」(『瀛奎律髓』卷之二十五)の拗體論を、續く「變體類」(同書卷之二十六)の虛實對偶論とともに、江西派詩學の重要な論據に据えた<sup>(46)</sup>。當時の方回の胸奥に去來したのは、杜甫、賈島そして黃庭堅の作品中にまま見られる、變則的な律詩を系統立てて論ずることにより、こうした系譜を正統的に受け繼ぎながら、唐詩とは異なる獨特の風格を打ち立ててきた江西派を、宋詩の主流に位置づけたいとの思いであつたと想像される。

## 注

(1) 方回著、李慶甲集評校點『瀛奎律髓彙評』(全三冊)(上海：上海古籍出版社、二〇〇五)に據る。以下『彙評』と略す。なお、本稿中に引用した個々の律詩の詩題や詩句は、『全唐詩』(北京：中華書局、一九八五)もしくは各詩人の校注本等に従つて改めたところがある。以下の各脚注を参照されたい。

(2) 『中國文學研究』第三十五期(東京：早稻田大學中國文學會、



二〇〇九年一二月）所收。

- (3) 筆者の最近の五言拗律に関する調査は、『中國詩文論叢』第二十九集（東京：中國詩文研究會、二〇一〇年一二月）所收の拙稿「張九齡と王維の五言『拗律』について」および『專修人文論集』第八九號（東京：專修大學學會、二〇一一年一〇月）所收の拙稿「五言拗律はいつ發生したのか」に詳しい。

- (4) 注3に挙げた拙稿「五言拗律はいつ發生したのか」では、周弼、范晞文、方回ら宋人の主張を整理し、拗體の各形態を歸納したうえで、筆者自身の調査によつて、それらの形態が初唐の末から現れ始め、盛唐の詩人らによつて確かに運用され始めたことを検証している。本稿と合わせて参照頂ければ幸いである。

- (5) B式第一字が●印で示されているのは、第三字が平聲となつたため、孤平（●○○●●○）を犯す危険がなくなつたからである。

- (6) 詩題は清の仇兆鰲『杜詩詳註』（全五冊）（北京：中華書局、一九九九）に據る。なお、本稿に引く杜詩の詩題や詩句については、清の浦起龍『讀杜心解』（全二冊）（北京：中華書局、二〇〇〇）および『杜詩詳註』を参照し、異同があれば注記した。

- (7) この「尙」字を方回は平聲に讀み、紀昀もそれに従うが、『廣韻』では平聲の「尙」字を確認できず、やや判然としない。いま方回の讀みに従つておく。

- (8) 『杜詩詳註』は「狼」字に作り、「一に『虎』に作る」と注す

五言拗律の系譜（丸井）

る（第四冊第一六一二頁）。

- (9) 『濟世策』三字皆仄、『尙書郎』三字皆平、乃更覺入律。『彙評』第一一〇九頁
- (10) 「此亦雙拗、乃『濟』『尙』二字迴換、非三平、三仄之謂。」『彙評』第一一〇九頁
- (11) 詩題や詩句は『黃庭堅詩集注』（北京：中華書局、二〇〇七）第一〇四二頁に従つて改めてある。以下、黃庭堅詩の引用はすべて同書に據る。
- (12) 『彙評』第一一一四——一二二頁參照。
- (13) 『豺虎』『鵝鶩』又是一樣拗體。『彙評』第一一〇九頁
- (14) 「上句二四不諧、下句第三字必用平聲以救之、亦是定格。」『彙評』第一一〇九頁
- (15) 注2で挙げた拙稿「張九齡と王維の五言『拗律』について」を参照されたい。
- (16) 徐鵬校注『孟浩然集校注』（北京：人民文學出版社、一九九八）第二七一頁に據る。
- (17) 謝思煒撰『白居易詩集校注』（全六冊）（北京：中華書局、二〇〇九）第一〇四二頁に據る。
- (18) 王國安『柳宗元詩集箋釋』（上海：上海古籍出版社、二〇〇七）第三六八頁に據る。
- (19) 『彙評』第一一〇九頁では「何」字に作るが、『杜詩詳註』や『讀杜心解』に従い「周」字に改めた。
- (20) 『彙評』第一一〇九頁では「連」字に作るが、『杜詩詳註』や『讀杜心解』に従い「車」字に改めた。

## 中國文學研究 第三十七期

- (21) 『彙評』第一一〇九、一一一〇頁から引用。
- (22) 「此單拗法。單拗者、本句三、四平仄互換也；惟用於出句、不用於對句。」(『彙評』第一一一〇頁)
- (23) 「此乃巴蜀、『巴』字不可易、以『有』字拗之耳、下說非是。」(『彙評』第一一一〇頁)
- (24) 「江山兼有巴蜀、寫其形勝。棟宇起自齊梁、推其古迹。」(『杜詩詳註』第九九二頁)
- (25) 「遠近數千里、上下數百年、祇在『有』與『自』兩字間。而吞納山川之氣、俯仰古今之懷、皆見於言外。」(清・何文煥輯『歷代詩話』上(北京：中華書局、二〇〇四)第四二〇頁から引用)
- (26) 李嘉言『長江集新校』(開封：河南大學出版社、二〇〇八)第一一〇頁に據る。
- (27) この「疏木」の語、『全唐詩』にはこの賈島詩の用例のほか、「四鄰見疏木」(李頎「宴陳十六樓(樓枕金谷)」詩)、「稜稜靜疏木」(李頎「龍門送裴侍御監五嶺選」詩)、「影搖疏木落」(馬戴「田氏南樓對月」詩)、「日回禽影穿疏木」(辛夤遜「句」)の四例しか見られない。
- (28) 詩題は李嘉言『長江集新校』第五八頁に従った。
- (29) 「客」字、『僧』字拗對、詩家甚多。」(『彙評』第一一一一頁)
- (30) 『全唐詩』卷一百四十八に據る。
- (31) 『全唐詩』卷二百九十三に據る。
- (32) 『全唐詩』卷三百八十四に據る。
- (33) 『全唐詩』卷五百二十八に據る。
- (34) 三浦晉撰『詩轍』(東京：中文出版社、一九七七)第一四七頁から引用。
- (35) 拙稿「五言拗律はいつ發生したのか」第一九〇頁を参照されたい。
- (36) 徐鵬『孟浩然集校注』は尾聯下句の「坐」字を「空」字とする。もし孟浩然の原詩の末句が眞に「日暮空聞鐘」であるならば、「●●○○○」という「平三連」を再び犯してしまうことになる。
- (37) 詩題は『黃庭堅詩集注』第四三六頁に従って改めた。
- (38) 『腐草』之『腐』、不容不拗、緣一定字不可易、如『備萬物』、『無四隅』亦然。」(『彙評』第一一一一頁)
- (39) 「起二句是拗字、次句自應二平。『腐草化』得用三仄、乃正格。以爲拗字、謬甚。」(『彙評』第一一二頁)
- (40) 「以『我』對『君』、雖非字之工者、亦見拗句之健。」(『彙評』第一一二二頁)
- (41) 『全唐詩』卷六百七十九に據る。
- (42) 『全唐詩』卷五百三十九に據る。
- (43) 拙稿「五言拗律はいつ發生したのか」第一七二頁を参照されたい。
- (44) 松浦友久著『中國詩歌原論』(東京：大修館書店、一九八六)「中國古典詩における對偶の諸相」第二六九頁から引用。
- (45) 以上、王楙著、王文錦點校『野客叢書』(北京：中華書局、一九八七)卷第十九「拗句格」の條に基づく。拙稿「五言拗律

はいつ發生したのか」第一六〇頁をも参照されたい。

(46) 李慶甲氏も『彙評』前言第四頁で『拗字』、『變體』之法對於創作具有蒼勁瘦硬風格的律詩確實是重要的藝術手段，它們是『江西派』詩法體系中較有價值的精華。」と述べている。

\* \*

标题：五言拗律的传承谱系

——以方回《瀛奎律髓》〈拗字类〉为线索——

摘要：宋末元初的方回在其《瀛奎律髓》〈拗字类·五言十首〉中收录了杜甫、贾岛、黄庭坚等唐宋诗人的五言拗律，并展开其独有的拗体论。本文以该书中的记载为线索，考查了这些拗律的形式从唐诗传承到宋诗的过程。具体而言，“仄三连/平三连”（例如：平平仄仄仄/仄仄平平平）这一联语虽然在唐人五律中极为罕见，但是在杜甫和黄庭坚的七律中则时而可见；而由杜甫和贾岛等人发明的破格联语（例如：仄仄仄仄仄/平平平仄平），经过中晚唐，在黄庭坚的五律和七律中得到了完全继承，如此等等。可以想见，方回描述五言拗律的传承谱系的本意，是想把宋代江西诗派作为继承了唐诗的正统流派，同时将该派独特的群体风格定位为宋诗的主流。

关键词：拗律 方回 瀛奎律髓 杜甫 贾岛 黄庭坚

五言拗律の系譜（丸井）